

五月、敵も強く、やむ無く反転命令による退却となり、犠牲者も続出、負傷兵も歩けないものは手榴弾で自爆する者、部隊は玉砕寸前の危機に直面し、部隊長命令により私も重要書類を焼却し、残骸は深く埋没しました。五月十三日夕刻であった。幸いにも友軍の援護にて無事山門へ脱出でき、再び宝慶に集結しました。

八月十五日の終戦の報告を受けたのは二日程遅れてでありました。九月上旬より岳州の近く栄家湾まで行軍で退り、ここで武装解除となり全兵器返納して兵隊は丸裸となり、捕虜の身となりました。次第に食糧事情も悪化し、ただ帰還命令を待つばかりです。毎日使役に出て甘藷を民家よりもらって帰り、空腹を満たし生命を継ぎました。

ようやく二十一年四月になって移動命令が出て、武昌より漢口を経て北支廻りの列車輸送で上海に到着、六月中旬ごろ上海港より乗船、鹿兒島港へ上陸しました。本土の山が見えかけた時の感激は忘れることが出来ません。私は無事に帰還でき懐かしい故郷へ帰ることが出来ましたが、異国の地で青春の華と散った戦友

諸氏、本土空襲により犠牲となられた多くの人々、尊い生命を失われた方々の事を思えば、今日の平和を永遠にたもち、二度とこのような惨事の起こらないよう努めるのが私達に課せられた任務であります。

四十有余年の昔を省みて筆を執りました。

軍国主義の渦の中の人生

新潟県 宮野 甚之丞

私は専業農家の長男として明治三十一年生まれ、大事に育てられて同三十八年四月義務教育四年制度に一年生として入学した者です。

当時、日本は世界最大の大国ロシアに陸海軍とも大勝し、国中沸きに沸いておったときでした。新津から水原新道を凱旋兵が帰ってきたのを迎えた思い出があるのです。それからの日本は軍国主義の道を突き進んだのです。私はその後学制が六年制になり、農業は自給自足の時代でありましたので農林学校に学び、基礎

教育を修得し、その上農業試験場が総合的試験している実績のある長岡の研究所に入所して、一人前の百姓道を身に付けることができた。これからは実行だという時に兵隊検査があり甲種合格となった。

一年志願制度があつたので、大正七年十二月一日、第十六連隊に入隊したのですが、シベリアの風雲は急を告げるようになり、その教育が厳しいものであつた。同八年十一月三十一日除隊のときは動員下令、先発隊が出発し、われわれは軍曹であつた。

ところが翌九年六月一日より三カ月間、予備召集で入隊したら留守隊でわれわれ志願兵は新潟、長野、福島出身で、全国教育を受けた教官は声を大にして「お前等は下士官教育を完了後はシベリア行きだ」と朝から晩まで厳しいシゴキは忘れられない。しかしこの時、私は難関突破の強い意志ができた。このことは軍隊教育のありがたさで、今も感謝している。それが八月三十一日曹長として召集解除となった。

大正十年九月一日、見習士官として三カ月予備召集され、事変和解後の第十六連隊第九中隊第三小隊長と

して秋季演習に、そして大演習に、日本としての六個師団大演習、多摩川の決戦でおわり、代々木で大観兵式が行われたことは一生忘れられぬ体験である。また新潟、長野、山梨、静岡まで、今にして思えば忘れることのできない三十二日間の徒歩演習、かくして翌年少尉に任官、後備召集や将校演習会をかさね、毎年陸軍省より㊦の戦時勤務の内命があつたが、その当時は三十六歳で退役になる制度の時代であつた。

その後、百姓に専念、それと在郷軍人会や青年学校の教官や翼賛会の役員、国防婦人会の竹槍訓練までさせられておつた。

昭和十九年六月、戦況不利、本土決戦のうわさのさなかに田植えも終り、ホットしておつたときに、それこそ思いもかけぬ赤紙の召集令状なのです。退役十年目、見返しても赤紙だ。急ぎ軍装品を揃え、第十六連隊に入隊したら老將校が多く、私等はその中でも若い方、健康診断、予防注射だとあわただしい。四日目には軍用列車で出発だ。

博多に着いたら野戦第一戦の補充隊行きが知らさ

れ、本隊がどこかも分からぬまま乗船、各隊六千人の梯団として暗夜出港、西に向かったが雨となり急に舵を北に急速に突進、着いたのは釜山港であった。しかし制海権は敵のものである。そして奉天で軍装品を受領、夜行にて山海関を通り南京、武漢三鎮に着く。ここもまた制空権は完全に敵方であった。漢口にて嚴重な身体検査があり、熱暑に耐え得る兵だけが対岸の武昌に渡ることになる。

私は夜陰に漢口時計台前より軍馬百七十三頭の輸送隊長を命ぜられ、朝まで船で送らねばならない。農家よりの徴発馬のため苦勞したが明けるまでに渡河完了。次の目的地岳州まで三十里、ようやく岳州郊外凹地に馬を繋いだときは驚きであった。雑林も沢も小高い山にも幾十万の兵で充満、出発命令を待っておった。

十九年八月初旬の大陸の暑さ、敵機は銃撃する、爆弾を投下する、油断ができぬ。いよいよ長沙に向かつての出発だ。六貫もある背のう、熱砂の中死臭やマラリアや赤痢の中の夜行軍。六千人の補充兵が連日前線へと急いだ。長沙、衡山、衡陽、冷水浦、零陵、桂林、

柳州、宜山まで八百八十里ようやく半年で師団司令部へ着き申告することができた。

昭和十九年十二月三十日、第百十六連隊本部着、第二大隊第七中隊に編入兵二十二名とともに警備地、羅城に着いたのは大晦日の夜であった。その日は内地より征途についてより実に六カ月。北支、中支、南支と本隊の占領地を夜行軍で追及し、熱暑と病気の野戦の跡を追って、全支に鏡部隊として恐れられた越後兵、しかも感状中隊に編入されたことは大きな誇りでもあった。

羅城警備中忘れてはならないことはバナナ、川魚、砂糖、野菜まで一月でもスクスク伸びている南支の良い所に警備、その上、郷土の兵・予備・後備・現役までほとんどが越後兵であったことが何よりであったし、一月一日には第二大隊の将校宴会、羅城町の自警団の招待会の乾盃等、今もまざまざと心に残っておる。それと昭和二十年一月十一日突如、師団命令により幾多の戦闘に戦病死された兵たちの遺骨護送を命ぜられ、後方三十里無警備の中を駄馬に遺骨を載せ、病兵

三十余名を軍司令部の柳州まで各隊よりの兵と共に飛行機を警戒しながら行軍、無事司令部へ届け得たことは忘れられぬ苦難で、一泊の上、師団へ報告、ホットしたことは出征中の難関の一事例であった。

また昭和二十年四月二十日、都安作戦開始、当地の警備兵出動のため一線よりその他の警備補充のため独立混成第八十八旅団（冲天部隊）転属の命令あり、第二大隊より二百三名の転属者指揮官として私が大隊長に申告し出発することとなる。懐かしき羅城を後に後方白砂鋪まで百里の地に編入替えされ省境・会龍橋の警備に当る五百二十一大隊第二中隊であった。ところが状況大変悪く、分隊単位の行動はできず、気の許さぬ状況であった。

ついに敵の大反抗があり、六月二十日朝から銃砲撃、飛行機も加わり、大軍が押し寄せて軍司令部との公路を断ちきられる危機である。連日昼夜、砲声ひびく中、三日目に急援の命あり、急ぎ戦線に近づくと戦車連隊が山岳のため行動できずにおったので、その護衛の任につき、第三陣地の激戦を見ながら一線に参加できな

かった。夜になって熾烈な攻撃をしていた敵がピタリと声を立てなくなつたが、翌朝敵方を見ると、あれほどの大敵が一兵も残らず潮の引くように退却しておつた。それは後で分かつたことだが、第百十六連隊が応援に來たのを山頂より望見した、鏡部隊の勇猛さを知つてのこと、さすが本家の強さを知らされた。

それと各戦線とも知らずにおつたのだが、ポツダム宣言がその時は出ておつた気がします。日本の戦況極めて悪く、それが敵軍にも土民にも知れわたつていたように思われます。奥に引き込んでいた兵が前面に出てきて各部署に帰つてきた。敵兵の増加を知らぬは日本兵ばかり。八月初め大隊本部より無電あり、警備地を撤去、白雲山にて大隊の集結を援護せよとの命あり。二十年八月十五日、その白雲山に退却、野菊を手折り祭壇を作つてお盆だと東方故国を拝んだのが最後の警備でした。

速やかに警備を中止し大隊に復帰すべしの無電で、前面公路は敵が一杯だし、脱出するとすれば裏街道の石畳三尺ぐらいの道だ。音のせぬよう靴に藤蔓を巻き

静かに通るよりほかなく、そろそろ下山したら雨となつた。支那兵は雨となると家に引き上げる習慣あるを幸いに、暗夜静かに前進したらあんのじょう大木を倒し妨害している。静かに起こして進むと幸いに友軍の救助隊に会え、感激の握手で一夜を衣服干し、翌朝快晴の道を大隊本部到着、直ちに出発、軍公路に着いたら人員、馬、車両等いっぱいの大行進、敵機頭に飛来しても銃撃はせぬ。

敵兵おれど射撃はせぬ。不思議に思つて行進を続行中、旅団命令あり。

「トラック二台に軽機四をもつて旅団長を護衛、衡陽に向かうべし」

とのことで、混雑の中、三十里を抜け出て衡陽郊外の一部落に設営することができた。そして本隊到着後、衡陽市に着いたら真新しい軍服に短銃を持った支那兵が警備中で、ああ負けたのだと思つた。翌朝、全員集合の中で旅団長は陛下のお言葉を読み上げたので初めて日本の敗戦を知り、ただただ涙した。

去年あれほど張りつめて追及した道を、敗戦を知ら

され重い足取りで昼夜の別なく長沙を目指して歩いた。長沙に着いたら道いっぱい土民、それと真新しい高射砲トラックが整然と接收されておる。次は岳州だ、郊外から帰つてきた日本兵が各隊ごとに集結、重要書類の整理、抑留の指示で順番を待つ私にまたも大隊命令あり。

大隊の荷物および病兵をつれ金口鎮へ出発（幸いにトラック六台に分乗できた）。旅団が抑留地に着いたら、その周辺部落に駐留することになり、一応民宿、一部は掘建て小屋に寝起きすることになり、警備中に進級した一階級上がり中尉の襟章をもらった。武装解除の日程決定して荒川町羽ヶ榎、国井隊長が返納隊長に、宮野中尉が副隊長に。

昭和二十年十月二十三日、武器返納、丸腰となる。

無力の敗残兵の姿こそ誠に哀れなるかな。昭和二十年十月下旬より金口鎮の抑留生活が始まった。常に中支の真中、気候は良く、揚子江と池には雑魚がいる。野草、蝗、バッタ、とくに堤防にはノビル、レンゲ、クローバ、油菜等食べれるものが充分ありそうだ。その

上に豆腐屋とごま油屋があった。私が百姓だから、この時自然に植物を手当り次第に取り入れて不足を補ったことで他部隊より栄養失調者が少なく済んだ。そして乗船を夢見て、石粒に布を巻きキャッチポールまでして体力保持に力を入れておった時、乗船第一報が入った。上海近くから帰還開始とのことで、初めて故国のことが思い出された。二十一年三月末のことであった。

四月末、六カ月の抑留生活に初めて朗報が入った。金口鎮に船が来る。そして上海に向う。この時、中国人宿舎の者たちに兵が私物を与え、良く世話してくれたと固い握手で礼をいって出発。すばらしい活動に入っておった上海市政府に着く。最後の私物検査で乗船を待った。それは忘れもしない二十一年五月十六日。

待ちに待った乗船だ。足掛け三年、二度も支那の正月を見、そしてわれらの戦線は勝ち戦であったのにポロポロの軍服、色あせた戦闘帽、まっ黒の顔に生氣あふれる輝く目、そして乗船完了。「ポー」と汽笛が鳴り静かに岸壁を離れたとき助かったと思った。そして

沖合にて一泊、日本人による日本食、安堵の姿で前後不覚の眠りに入った。

二十一年五月三十一日の朝、故国が見えた。敵機がそしてかもめが迎えてくれた、山口県仙崎港。そして設営のため一足先に故国の土を踏む。黒人兵と若い娘が散歩しておった。国防婦人会は日本婦人会となり出迎えてくれた。おむすびと白菜漬、ご苦労様と、忘れられない。軍の解散式あり、直ちに戦友と別れ北陸線で帰郷の途に着く。長岡駅では長生橋が見渡せて空襲のすごさを知って、新発田駅へ着いたら、婦人会の人々がタオル、石鹸、水を持ってきてくれたことは今も忘れられない。保健所の検査を受けたときに父の死を知らされ、帰宅を前に心の整理をするため宿舎に一泊した。

翌二十一年六月八日早朝、赤谷線で復員、仏前に報告、九日の朝役場に留守中のお礼をし、直ちに県庁の友人を尋ね戦後の方向を聞く。土地解放、山林買収、財産税等のことを知り、直ちに相続登記を依頼し、二百余の小作人へ土地解放をする。希望者は申し出るよ

うに通知を出した。そのため八十余町歩の契約成立、残りは財産税に物納することに意を決定、先手先手と処理した。財産税は持てる全てが評価され、戦後処理に当てられたのではと思う。山林買収は反当り九十二円の安さ、大部分引揚げ者の入植地になった。

その上、最も重い追放処分は、世の中へ出るなどいうことで、この時は目の前がまっ暗になった。すぐ氣を取りなおして追放記念だと自分の買収された土地二町歩を買戻し開墾。精根込めて黙々一畝を耕地にして次々と増産戦士として作付けし油菜、茶、大豆、甘藷、西瓜、苺、アスパラ、栗、椎茸、実桜、蜜蜂飼育と現金収入に専念した。苺等は四時起床、八時までに六貫目収穫した。蜜蜂は何よりの収入で一升瓶百本、桜桃一日に九貫も売ったことがあった。今、乳牛を導入してより三十余年、二百坪の牛舎に育成とも五十頭余、下越地区共進会に最優秀賞を得るにいたり孫夫婦で頑張っておってくれる。

私が開墾完了、追放解除のとき、村民有志三百余人者が小柳牧衛様とともに、解除記念祝賀会を開いてく

だされたときは、一生の感激で忘れられないことであった。同じに大字区長、中学PTA会長、農協理事に推され、今は老人クラブの一員として健康に氣を付け、この年になっても何かをと、前向きにそして世情の急変を見逃すことのないよう心がけ、幸せな日常です。

白鶴舗の死闘

― 鞘は邪魔だ！白刃で突入―

滋賀県 清水 敬 一

昭和十九年五月二十七日の未明、湘桂作戦は火蓋を切った。この作戦は支那派遣遺総軍が第十一軍の九個師団を中核とする進攻部隊のほか、直接間接に五十二万の大軍を動員した国軍有史以来の大規模作戦といわれ、わが嵐兵団も甲装備作戦師団として終始最前線で激戦を続けた。

我々は洞庭湖畔の岳陽より南下し、新墻河を払暁を期し一斉に渡河し、屈原の入水で有名な汨羅の渚のあ